保育の現場から

保育者の模索を支える

～園内研修の様子の一つから～

佐木彩水

私立幼稚園の大半は、若い二十代の保育者が中心になって、保育をしているのではないかと思います。筆者は、そうした幼稚園に勤務して、職員室を普段の居場所にしながら園内研修を担当してきました。

研修担当である筆者の仕事は、研修報告を書く保育者の思いや考えを聞き、時々問い返すことです。一回につき一時間半ほどのやりとりが二回から五回ほど繰り返されて資料ができます。

「最近、どんな感じ？」漠然とした質問から研修の話し合いが始まります。研修テーマや研修の対象は、話し合いや資料作りの過程で、保育者自身の中に浮き彫りになってくるのを待ちます。テーマの探索に時間がかかりますが、問いを保育者が自分のものにしていきやすいと感じています。

今回は、保育経験二年目で年中児を担任したA保育者（当時二十一歳）が七月下旬から十月末に行った研修資料作成の様子を紹介したいと思います。

話し始めは、なぜだかイライラしてしまうというものでした。この報告の数年前にも漠然とした「イライラ」から始まった研修資料がありましたので読んでみることを提案しました。数日後、A保育者は、ある男の子（B）をしかることが多く、「イライラ」し、彼の姿を「気がつくと目で追っている」ことに気づいたと口にしました。

なぜだろうという筆者の問いに、彼女は「集いの時間や外に出る前に座って待つ時などはふらふらと立ち歩くことが多く、また他児とのトラブルも絶えない」からと説明しました。

あえて大ざっぱに言えば、Bは「よくいる元気な甘えん坊の男の子」で育ちの面で大きな困難を抱えている状況ではありませんでした。しかし、A保育者にとっては、「気がつくと目で追っている」ような心情なのです。記録をとろうということになりました。

記録をとり始めると、「イライラ」の具体的な様子が見え始めました。

A保育者はBをしかることが多いために、一学期は彼と信頼関係が築けていけるのか不安で、彼ができたことを認めたり、事情を聞いたり、共感したり、彼の行動を「見逃さない」ようにして試行錯誤していたと書いています。それほどA保育者が気持ちを向けているにもかかわらず、「向き合って話をすると『モウイイ！』というように私（A保育者）から離れていってしまう」様子が毎日続くというのです。見逃すまいとするA保育者の努力の傍ら、振り切って行ってしまうBの背中を見るA保育者の心のざわめきが聞こえてくるようでした。

記録を書き始めたころから、A保育者の心情を説明する表現の仕方に変化が見られ始めました。Bが「ふらふらと立ち歩いたり」、「他児とのトラブルが絶えない」からという表現から、BにA保育者の思

いが伝わっているのかわからないからと表現されるようになりました。九月の下旬ごろです。

さらに、違うBの姿の記録を書き始め、A保育者の不安は疑問へと姿を変え始めます。Bは一学期に比べてA保育者にべったりと甘えたり、『ンー』と少し照れくさそうな笑顔を私（A保育者）に向けるなどして、僕来たよ、ということを私に知らせに来る姿が見られるようになった」といいます。信頼関係は築きつつあるように感じるのに、なぜ私から離れてしまうのだろう、という疑問が言葉になると、A保育者は一息に資料を仕上げました。

A保育者はまとめで、次のように述べています。

「私はいままでBに対して、座らない姿を見逃さず、見つけた時には必ず話をするようにしてきた。しかし、私の方からBに対して詰め寄りすぎていた部分もあり、そのために、Bが離れてしまうのかもしれないと感じた。時にはひと呼吸おいて彼の様子を見守ることも必要なのかもしれない」

「Bはやりたいことと、やらなければいけないことの間での葛藤を抱えているのではと思った」

話し合いでの筆者の発言が、大きな影響力をもつこともありますが、この資料の場合、A保育者自身が漠然とした「イライラ」という心情を、日々の子どもとのやりとりの感触を足がかりに整理していきました。

今回のような「イライラ」や「クヨクヨ」で表される漠然とした心情が、問いの発端になることは少なくありません。子どもとの日々の心情のやりとりは、若い保育者にとって、切迫した問題になりがちです。

一方、そういった若い保育者が困難さを感じる子どもの姿は、幼児期の子どもによく見られる、育ちに伴って現れる姿であって、特別「気になる」姿で

はないことも少なくありません。一コマだけをとれば、何が問題かと、首をかしげるほどのごくささいな日常的な子どもとのやりとりであったりします。

しかし、こうした心情を、当事者である保育者自身が省察することは、保育者が保育のよりどころとする子どもの育ちの感触や保育者として在りたい姿を、体験を通して獲得する足がかりとなることが多いように感じます。

知識として育ちの様子を耳にすることと、実際に子どもとのかかわりの感触を経験し、それに毎日つきあい、もちこたえられるようになることとは別です。もちこたえるためには、当事者である保育者が自分の心やからだを動かす力を蓄える必要があるように思います。なぜなら、思ったよりも、心もからだも自分では動かせないものだからです。心やからだを動かせるようになるためには、日々流れるように過ぎていく生活の一コマを、体験として自分のものにしようとすることが、大切だと思います。

ですから、体験への契機となる問いは、その人のものでなくてはならないと考えてきました。だからこそ、もっともらしい借り物のテーマや、研修資料として体裁がよさそうにみえるケースではなく、報告する保育者自身にとって、必然的であるケースや問いを探すことを重視してきました。

このような、知識とは異なる体験としての子どもの育ちや「こういう先生でありたい」と願う保育者のイメージを、当事者である保育者自らによって模索する過程を支えることが、園内研修において重要であると考えています。

（揖斐幼稚園）